

ヤスパース研究 ヤスパース哲学におけるケルケゴール思想からの影響

著者	中村 元紀
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	文学
報告番号	32663甲479号
学位授与年月日	2021-03-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012776/

氏名（本籍地）	中村 元紀（石川県）
学位の種類	博士（文学）
報告・学位記番号	甲第 479 号（甲（文）第五十八号）
学位記授与の日付	2021 年 3 月 25 日
学位記授与の要件	本学学位規程第 3 条第 1 項該当
学位論文題目	ヤスパース研究 —ヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの影響—
論文審査委員	主査 教授 博士（文学） 中里 巧 副査 教授 博士（文学） 三重野 清顕 副査 教授 相楽 勉

学位論文審査結果報告書〔甲〕

【論文審査】

中村元紀氏による博士学位（甲）請求論文「ヤスパース研究—ヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの影響—」の規模は、400字詰め原稿用紙に換算すると600枚相当（24万字相当）であり、量としては条件を満たしていると判断する。中村元紀氏は、2008年4月に東洋大学文学部哲学科に入学し、同学科を2012年3月卒業、さらに、2012年4月に東洋大学大学院文学研究科哲学専攻博士前期課程に入学し、同博士前期課程を2014年3月修了し、2015年4月に同博士後期課程に入学し、現在に至る。卒業論文・修士論文ともに、中里巧が研究指導主査であり、北欧思想・ヤスパース哲学思想・キェルケゴール哲学思想・実存哲学など、中村元紀氏の主な研究について、一貫して中里が指導に当たってきた。また、本研究内容の一部は、東洋大学文学部哲学科白山哲学会や、全国規模の学会において口頭発表されており、査読をへた全国規模の学会であるキェルケゴール協会の機関誌において論文発表されている。

本学位請求論文は、中村元紀氏の主要な関心である実存哲学の中核を、ヤスパースのドイツ語テキストや、ヤスパースが当時用いたキェルケゴールによる著作のドイツ語訳を愚直なまでに丹念に時間をかけて精読して、ヤスパースがキェルケゴールから継承した思想とヤスパースが独自に産み出していった思想を、主要な哲学概念を媒介にして、明らかにしたものである。現在、ヤスパース研究においてもキェルケゴール研究においても、それぞれの哲学思想の枝葉末節な部分や、哲学思想の一部を切り取って仔細に論じる傾向が強く、どちらかと云えば技巧的な面に力点が置かれているのであるが、本学位請求論文は、とりわけ限界状況下を生き抜いたヤスパースの実存哲学の最も重要な核心部を、はっきりと取り上げており、ヤスパースやキェルケゴールのドイツ語文献やドイツ語訳に正面から取り組んで、本学位請求論文自体が一種の実存哲学思想を継承している点でユニークであり、きわめて有意義なものとなっている。

1. 論文の目次

本学位請求論文の目次は、以下のとおりである。ヤスパース哲学思想とキェルケゴール哲学思想の関係、ならびに、この関係がどのように分析解明されているか、端的かつ矛盾なく報告する必要があるため、簡略化せずそのまま以下に掲げる。

凡例

はじめに

第1章 ヤスパースの主観—客観における両極性とキェルケゴール思想における「総合」・「自己」との連関性

第1節 『世界観の心理学』における個—普遍

第1項 個—普遍という人間の基本状況

第2項 個—普遍に対する人間の態度

第3項 『世界観の心理学』にて叙述されるキェルケゴールの「総合」と「自己」

第2節 『哲学』における主観—客観の両極性

第1項 客観性

第2項 主観性

第3項 主観—客観の両極性における実存

第2章 ヤスパーズ哲学における「内的行為」とキェルケゴール思想における「反省」との連関性

第1節 『世界観の心理学』における個人主義の二区分とキェルケゴール人間学との連関性

第2節 『世界観の心理学』にて叙述される「自分自身に関わること」と「内的行為」との連関性

第3節 『哲学』における「内的行為」

第1項 哲学と科学の区別

第2項 内的行為

第3章 ヤスパーズの孤独—交わりとキェルケゴールの閉鎖性—自由との連関性

第1節 『世界観の心理学』における「閉鎖性（閉じこもり）」と「デモーニッシュなもの」

第1項 閉鎖性の二区分

第2項 二区分間の閉鎖性における交わりの有無

第3項 デモーニッシュなもの

第2節 『世界観の心理学』における「あらわになること」からの逸脱とキェルケゴール絶望論解釈

第1項 ヤスパーズからみたキェルケゴールの憂愁

第2項 『世界観の心理学』にて叙述されるキェルケゴール絶望論

a) 「絶望して自分自身であろうとしない絶望」（地上的なものについての絶望）

b) 「絶望して自分自身であろうとする絶望—反抗」

第3節 『世界観の心理学』における「あらわになること」と「閉じこもること」の両極性

第4節 ヤスパーズ哲学における交わり論

第1項 他者との交わりについて

第2項 実存的交わり

第3項 総体的交わりの意志

第5節 『哲学』における交わりとキェルケゴールの『不安の概念』との連関性

第1項 「あらわになること」—「現実になること」

第2項 「かくある存在」としての現存在

第3項 交わりにおける欠乏

a) 孤独

b) 沈黙

第6節 『哲学』における帰依—反抗とキェルケゴール絶望論との連関性

第1項 帰依の場合

第2項 反抗の場合

第3項 帰依—反抗の両極性とキェルケゴールの信仰

第4章 キェルケゴール思想理解に基づくヤスパーズの例外者論

第1節 ヤスパーズからみたキェルケゴールの人物像

第1項 キェルケゴールのキリスト教観

第2項 誠実さ

第2節 ヤスパーズの例外者論

第1項 『哲学』における例外者論

第2項 『理性と実存』における例外者論

第3項 『真理について』における例外者論

a) 普遍に反する例外者

b) 客観的例外者

c) 狂言的な真理のパトス

おわりに

註

参考文献一覧

2. 論文の概要

以下、本学位請求論文の概要を示す。

凡例： ヤスパーズ著作文献については、現在刊行されている最新のドイツ語版全集を主として用いているほか、『カール＝ヤスパーズ蔵書目録』を参照して、ヤスパーズがキェルケゴール関連の如何なる文献を読んでいたか、さらに、ヤスパーズが当時用いていたドイツ語訳のキェルケゴール著作（日記や手紙を含む）文献（ゴットシェード・シュレンプ・ヘッカーなどによるドイツ語訳）を参照して、精確にヤスパーズのキェルケゴールからの影響を把握すべくつとめていることがわかる。また、補足的に、ヒルシュによるドイツ語訳キェルケゴール著作も参照して、キェルケゴール哲学思想の主要概念のドイツ語訳のニュアンスを確認している。

はじめに： ヤスパーズが評価して自らの哲学思想に継承したキェルケゴールの誠実さとは何であったか、また、これをどのようにヤスパーズがその思索をとおして、自分のものとしていったか、ということに対する関心が、本学位請求論文執筆の主要動機であることが示され、日本人研究者林田新二・浜田恂子・鈴木三郎やドイツ人研究者シュナイダース・ヒューグリ・ザーナーなどの先行研究における、ヤスパーズとキェルケゴールの関係性を批判的に総括しつつ、本論文の全体構成を紹介して、ヤスパーズの著作のうち、とりわけ、『世界観の心理学』・『哲学』・『理性と実存』・『真理について』を基層にしつつ、それらをとおして、ヤスパーズによるキェルケゴール哲学思想の受容と継承、ならびに、その先にあるヤスパーズ独自の発展、およびヤスパーズとキェルケゴールの明確な思想的差異が叙述されることがあらかじめ述べられている。

第1章 ヤスパーズの主観-客観における両極性とキェルケゴール思想における「総合」・「自己」との連関性： ヤスパーズは、『不安の概念』・『死にいたる病』などにおけるキェルケゴール哲学思想を模範にして、人間存在は矛盾対立的な構造をもっていると、終始一貫して理解していた。ヤスパーズのこうした人間理解は、『世界観の心理学』における個と普遍の矛盾対立、および、『哲学』における主観と客観の矛盾対立として、あらわれている。『世界観の心理学』においては、キェルケゴールにおけるいわゆる「関係としての自己」という概念が、人間理解の基層となっている。身体と心、言い換えれば、有限と無限が、人間においては対立し合う仕方では結合して（総合という関係）、そうした対立相克を自己という自覚的意識が、そのつどそうした対立を調停して均衡するように働く（自覚的意識という関係）というのが、「関係としての自己」の意味するところである。ヤスパーズは、「関係としての自己」における個を、現に生存している生身の人間として捉える一方で、無限を、人間知性によって把握される社会・国家・世界像として捉えている。また、自覚的意識という関係を、生成・生きる過程として捉えている。なお本論文筆者は、『死にいたる病』における「関係としての自己」を、子細に分析して、総合という関係・自覚的

意識という関係・信仰という関係について検討した上で、ヤスパースの人間理解を総括している。本論文筆者に依れば、自覚的意識という関係は、たんなる意識活動というよりは、実践的行為であり、「内的行為」とヤスパースは呼んでいて、「決意」とも言い換えている。『哲学』においては、対立図式は個対普遍から、主観性対客観性、言い換えれば、両極性に置き換えられている。主観性は、全体において自分がどのような立場にあるのか、知る働き（世界定位）として理解されている。また、客観性は、知る働きをとおしてあらわれイメージされる対象やそうした対象の性質であり、全体性・理念ともヤスパースは呼んでいる。主観性には、衝動なども含まれることもヤスパースは含意している。主観性と客観性の対立相克を均衡させていくのは、『哲学』においては「実存」概念であり、この「実存」概念の要が、他者との交わりである。他者との交わりなくしては、ヤスパースに依れば、再び主観に没入することになり、「デモーニッシュ」な状態、すなわち、主観に埋没して、もはや主観性と客観性を均衡することの不可能な状態に閉塞する。他方、既存既成の国家・宗教・文化や、カントの道徳法則のような抽象性に固執する客観主義もまた、実存ではない。「実存」をヤスパースは、「浮動」の状態と表現している。

第2章 ヤスパース哲学における「内的行為」とキェルケゴール思想における「反省」との連関性： ヤスパースにおける「実存」は、「内的行為」に併行するものである。では一体「内的行為」とは何か。本論文筆者に依れば、「内的行為」というヤスパース固有の概念は、キェルケゴールの反省概念に由来する。論文筆者は、キェルケゴールにおける「絶望的無知」と呼ばれる俗人的在り方（自分が絶望しているのに決して気づかない在り方）を、「無反省」として理解するとともに、「自覚的絶望」（自分が絶望していることに気づいている在り方）を以て、「反省」として捉えている。ヤスパースは、『世界観の心理学』において、「無反省」的在り方を「無意識的个人主義」、反省的在り方を「意識的个人主義」と呼んでいる。キェルケゴールは、人間存在を「単独者」とも呼んでいるが、ヤスパースから見れば、「単独者」は、たんなる知的働きをもつものではなく、感情や欲望や宗教性などを抱えたきわめて複合的存在であって、こうした複合的存在の自覚的働きは、反省というよりはもはや、実践的次元における行為、言い換えれば、「内的行為」と呼ばれるべきである。キェルケゴールもまた、「実存」概念については、たんなる知的活動にもとづくものではないことを、その著作『後書き』のなかで子細に述べている。さらに、キェルケゴールにおいても、「関係としての自己」は、他者（神）との関係（祈りや信仰）が基盤となっている。ヤスパースにおける「内的行為」は、こうしたキェルケゴールの理解を継承発展させて、複合的存在と他者という二つの要素から、「実存」概念を捉え直したものであり、ヤスパース独自の理解となっている。ただし、キェルケゴールにおける神は、伝統的キリスト教の枠内に留まるものであるが、ヤスパースにおける他者は、究極的には「超越者」とヤスパースが呼ぶものであり、既存既成の宗教に捕らわれるものではない。

第3章 ヤスパースの孤独—交わりとキェルケゴールの開鎖性—自由との連関性： 本論文筆者は、さらに「内的行為」における他者ないしは他者性について、探究を進めて、「内的行為」が「交わり」を伴うものであり、それがキェルケゴールにおいては「自由」ということであること、また、「交わり」に反するものとして「孤独」があり、それがキェルケゴールにおいては「開鎖性」であることを論証していく。ヤスパースは、『世界観の心理学』において、キェルケゴールの著作『死にいたる病』に叙述されている「開鎖性」や「デモーニッシュ」について分析しており、「開鎖性」については、開放ないしは自由に復帰する可能性を残した「相対的開鎖性」と、決して開放や自由に復帰しない「絶対的開鎖性」があって、こうした「絶対的開鎖性」を「デモーニッシュ」なものとして捉えている。キェルケゴールは、『不安の概念』のなかで、キリスト教儀礼の聖体拝領（Communion）について取り上げて、これが共同体の基礎であると考えている。ヤスパースにおいては、第一義的には、他者とは超越者のことであるが、超越者は、暗号という仕方で、様々な事物をとおしてあらわれてくるのであり、超越者のあらわれは、隣人・社会・書籍・自然・詩歌・芸術作品など多様である。キェルケゴールの場合には、伝統的キリスト教に収斂する仕方で、開鎖性や開放性が語られるのだが、ヤスパースの場合にはむしろ、そうした既存既成の宗教性の、いわば呪縛から解放される仕方で、「交わり」が論じられており、こうした「交わり」をヤスパースはさらに、素直さ・絶対的誠実さ・愛の生命原理とも

形容している。ただし、こうした「交わり」を希求するためには、まずもって、「相対的閉鎖性」という孤独が必要であると、ヤスパースは述べている。ヤスパースにおいて孤独と交わりは、不二不三の関係にある。こうした孤独と交わりとの関係性について、本論文筆者はさらに、ヤスパースの著作『理性と実存』を参考にして、帰依・沈黙・伝達・唯一性・挫折といった、個々の実存様態について丹念かつ仔細に取り上げながら、論究を進めている。ヤスパースは、「相対的交わりの意志」という言葉を用いて、究極的には、交わりを望むか否か、真なる自己を求めて実存の歩みをおこなうか否かは、自由意志の問題であることを、指摘している。

第4章 ケルケゴール思想理解に基づくヤスパースの例外者論： 本論文筆者は、ケルケゴール哲学思想とは異なるヤスパース哲学思想の独自性について、ケルケゴールにおける「例外者」概念に対するヤスパースの批判を取り上げて、論究を進めて、『理性と実存』・『わがもの化と論争』・『真理について』などのヤスパースの著作を、適宜参照していく。ヤスパースによる「例外者」概念の批判の骨子は、ケルケゴールの生涯とその哲学思想が、ケルケゴール自身の誠実さや置かれた状況によるものであったとは云え、ヤスパースから見る限り、なお閉鎖的であり個人主義的であるということ、また、そうした閉鎖性と個人主義は、おそらく、ケルケゴールの有していた宗教性に依るものであり、そうした宗教性の限界を越えて、哲学という領野において真理を希求することこそ、真の自己を豊かな交わりを以て、実現することができるということである。

おわりに： 本論文筆者は、本論文全体を振り返り、自ら総括して論究の骨子をたどりなおして、ヤスパース実存哲学がケルケゴールから多大な影響を受けて、思索の多くを継承していることを認めたくえて、ヤスパースとケルケゴールの決定的な相違点、すなわち、ヤスパース実存哲学の独自性ないしは優位性として、如何なる状況や立場にある人に対しても、開放的である点を示して、こうした開放的である点について、「生産的受容ないしは受容的生产」という言葉を使って、全体の論考を、締めくくっている。

註： 註は全部で、333あり、本文に対する補遺であるが、参照参考文献の引用箇所などが、仔細に記述されている。また、本文の議論展開を補完する説明や文献についての説明がなされている。400字詰め原稿用紙に換算すると130枚相当（5万2千字相当）に達していて、本論文筆者は、ヤスパースやケルケゴールの著作文献および様々な先行研究を丹念に調べて、よく思索している。

参考文献一覧： 参考文献一覧は、400字詰め原稿用紙に換算すると40枚相当（1万6千字相当）であり、ヤスパース自身のドイツ語著作・ヤスパースにかんするドイツ語と邦文の文献・ケルケゴール自身のドイツ語訳著作・ケルケゴールにかんするドイツ語と邦文の文献、および、その他のドイツ語と邦文の研究文献や事典類から成っている。これらは、本文や註に掲げられている文献類であり、博士学位請求論文レベルの研究として、十分な量である。

3. 論文の特質・価値および評価

本学位請求論文の特質は、繰り返しになるが、ヤスパースがケルケゴールから如何に多大な影響を受けているか、ならびに、その影響ないしケルケゴール哲学思想の受容の内実がどのようなものであったか、さらに、ヤスパースの生涯にわたる長い思索の過程のなかで、如何にそうした受容の内実が発展ないしは変容あるいは変節していったか、また、そうした思索の過程のなかで、ケルケゴールにはないヤスパース独自の、ケルケゴールとは異なるばかりか、むしろ、ケルケゴールに優位するような独自の哲学思想がなかったのかどうか、あったとすればそれは何であったか、ヤスパースはそもそもケルケゴールに対して如何なる態度を生涯にわたって取っていたのであったか、といった、ヤスパース哲学思想とケルケゴール哲学思想の関係性について、ヤスパースの立場から、ヤスパースのドイツ語著作、ヤスパースが当時用いていたケルケゴール著作のドイツ語訳、ならびに、ドイツ語と邦文研究文献を広くまた深く当たりつつ、究明したものであり、本学位請求論文は、本論文筆者である中村元紀氏の博士前期課程から現在にいたるまでの、思索を結集した労作であると云える。本論文において用

いられているヤスパースおよびキェルケゴールにかんする研究文献は、ヤスパースのなかで実存哲学思想が芽生え開花していった第一次世界大戦から第二次世界大戦の戦間期や第二次世界大戦後の混乱期、言い換えれば、限界状況を体験したか、容易に追体験しうる世代の著者によるものであり、本論文筆者によるこうした研究文献の選定によって、実存哲学思想の要となる中核的思索や概念を鮮明に浮き彫りにすることに成功している。本論文は、ヤスパース著『世界観の心理学』がとりわけ土台となっているが、これは、ヤスパース自身のキェルケゴールに対する受容の姿勢が、『真理について』などの晩年の著作にいたるまで、紆余曲折があるにせよ、『世界観の心理学』から一貫しているからである。本論文筆者は、およそ『真理について』にいたるまでのそうした紆余曲折しつつも一貫したヤスパースによるキェルケゴール思想の受容の内実を、子細に、本論文筆者自身がヤスパースの思索を追体験するかのよう、追跡し執拗に把握しようと努めている。また、本論文をとおして、ヤスパース哲学思想の姿勢が、キェルケゴールとは異なって、如何にしてキリスト教信仰に向かわず、実存理性に踏みとどまる仕方で、あらゆる立場の人々に対して開放的な哲学思想を希求したのか、すなわち、限界状況下ナチによる執拗な弾圧を受けた苛酷な体験をとおして、そうした開放的な哲学思想が希求されていったであろうことが、よく示唆されている。さらに、ヤスパースのキェルケゴールに対する生涯にわたる敬意は、キェルケゴールの誠実さ、言い換えれば、苦しみ喘ぎながらも、自分の人生を真摯に見つめ反省しつつ思索を深めて執筆活動を続けたキェルケゴールの言行一致という姿勢にあったことが指摘されているばかりか、如何に自分の人生を真剣かつ真実に生き抜いていくべきか、本論文筆者自身が反芻しながら、本研究が遂行されていることが行間からよく読み取ることができ、見事だと思う。こうした実存哲学思想の核心部が、現在の実存哲学思想研究においては研究関心が枝葉末節な方向に行き過ぎているために、残念ながら見出すことが少なくなっているなかで、本学位請求論文は、実存哲学思想の本道とも云うべき主要概念や思索の姿勢を、筆者自身が自らの人生や研究の糧とすべく努めながら、執拗に論究していて、きわめて価値の高いものであると明言できる。ただし、若干校正ミスが残っている点、悟性 Verstand といった言葉の用語法についてさらに厳密に検討すべきである点、ヤスパースによる「交わり」という概念と解釈学の関連性、ヤスパース実存哲学思想周縁の歴史的背景や文学芸術作品ならびに、北歐人であるキェルケゴールの立場から見たばあいのヤスパース哲学思想など、注意すべき点や今後留意すべき点が散見される。しかしながら、本学位請求論文は、執拗な思索をへつつ実存哲学思想の核心部を見事に明らかにしている点で、きわめて価値の高いものである。

4. 論文審査過程および公聴会

論文審査委員会過程は、主査中里巧、副査三重野清顕・相楽勉により、第1回を2020年11月11日に開催し、それぞれの意見を述べ合い今後の予定を確認して、第2回を11月22日に、第3回を12月3日におこない、12月22日に公聴会を開催し、同日公聴会后に引き続き審査委員会をおこなって、今後検討すべき点や留意すべき点が指摘されたが、本論文筆者の努力や熱意なども含めて全体としてはよい印象をもって受け入れられ、審査委員会は全員一致で本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

【審査結果】

以上のように、中村元紀氏の博士学位請求論文「ヤスパース研究—ヤスパース哲学におけるキェルケゴール思想からの影響—」は、価値のすぐれたものでありその評価も高い。また、文学研究科（哲学専

攻) の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。

本審査委員会は、中村元紀氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査結果に基づき、全員一致をもって本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。